

設立60周年を記念して「感謝の会」開催 アサヒロジスティクス

今年で設立60周年を迎えたアサヒロジスティクス(横塚元樹社長)は4日、東京・千代田区の帝国ホテルで「感謝の会」を開いた。当日は、取引先企業や金融機関、トラック協会関係者など各界から約500名が参列し、同社の設立60周年を祝った。

冒頭、挨拶に立った横塚正秋会長は、「60年の間、お客様や社員に対する感謝の気持ちとかいろいろあるが、私の今の気持ちは、おかげ様で」という言葉がピッタリ当てはまる。素晴らしいお客様に恵まれており、そのニーズに応えていけば必ず成長させていける。さらにそのお客様が、お客様を紹介してくれる。その結果、これだけの会社に成長させていただけると



挨拶する横塚正秋会長

な財産である品物を私たちに託していただいている。信頼がなければ荷物を託していただけない。その信頼に、そして期待に応えられるか、これしか私たちにはない。絶対に物流は止めない」という思いで、第三次創業期のスタートが切れたと思っている」と述べ、さらに私事と断つたうえで、「私自身も41年間、責任者をやってきたが、大きな節目のこの時期を境に、代表権の返上と会長を退任し、来期からは取締役相談役として、のんびりと余裕をもって皆様との約束を守るかどうかを見定めたい。今後とも、その期待を裏切らないよう、全社員一丸となって努めていく」と代表取締役会長を退任することを表明した。



挨拶する横塚元樹社長

できない。だからどんな事があっても、安定した物流を実現することが大切だと考えている。そういった意味で、創業から今までの想いを集約し、私の想いも込めて経営理念を見直し、「日本の食生活を支える物流インフラ事業」という文言を入れた。横塚会長の時代は、「従業員満足なくしてお客様満足なし」という考え方をCS・ESという言葉に集約した。そしてお客様に満足していただければ、当社に対し幅広く

い期待をいただき、いろんな面で深い付き合いをしていただける、という循環をより良い方向にしていけるのが大切との考え方が、CS・ES・S・CSだ」と基本的な考え方を述べた。そのためには、「物流はヒトがすべて。人材の質と量、これをしっかりと確保していく。そのためにはハード面、ソフト面での整備を進めていく。自ら考えて行動できる人材づくり、これに力を入れていきたい。また、物流機能をより高めていくことも必要と考えており、現在は東日本全域をカバーする物流会社を目指している」とした。そして、「物流業界の将来は非常に明るく思っている。そして、それをより明るくしていくのは、私たち自身がどう考え、どう行動するかで決まると考えている。まだ私も34歳。経験不足だ。生意気かもしれないが、そういったことの実現を、人生をかけてやっていきたい」とし、最後に、「諸先輩方が作り上げてきた当社の財産を有難く受け継ぎ、そしてまだまだダメなところを強みに変えるのが私の役割であり、責任であると考え始めた。そして当社の社員とともに、お客様にご満足いただける会社を作るのが私の役割だ」と決意を述べた。

次にヤオコーの川野幸夫会長と三菱東京UFJ銀行の石塚啓常執行役員、全日本トラック協会の星野良三会長、埼玉県の上田清司知事が来賓挨拶を述べ、小川修副会長の挨拶の後、嵐山町の岩澤勝町長の乾杯の音頭で祝宴に上がった。なお、小川副会長も挨拶のなかで退任を表明した。

同社は1913年(大正2年)に横塚元樹社長の曾祖父の横塚兵次氏が東京・大井で横塚運送店として、馬車による運送を始めたのがルーツ。戦後の45年(昭和20年)に兵次氏の長男で、元樹社長の祖父の横塚元吉氏がトラック1台の払下げを受け、埼玉県嵐山町で個人運送業を始めた。55年1月に旭運輸を設立。従業員13名、トラック5台で原乳輸送を開始した。76年5月には、限定免許を一般区域免許に変更し、チルド、フローズン食品の輸送を開始。87年4月に、横塚正秋現会長が社長に就任。2001年4月には社名を現社名のアサヒロジスティクスに変更。05年4月に小川修専務が社長に就任、横塚正秋社長は会長に。13年4月に横塚元樹専務執行役員が社長に就任し、小川修社長は副会長に就任した。現在は、6共配センターと6物流センターなど27拠点を中心に、運営と配送を自社で一貫して行う東日本地区の食品物流ネットワークを構築、毎日1万超の店舗へ配達を行っている。14年3月期の売上高は193億円。